

創造としての純粹経験

——ジェイムズとの比較に見る西田の統一的現在——

新井 潤

はじめに

本論は、西田幾多郎（一八七〇—一九四五年）の「純粹経験」をジェイムズ（William James, 1842-1910）の「純粹経験（pure experience）」を基盤とした根本的経験論（Radical Empiricism）と比較し、純粹経験の立場を共有しつつ西田がジェイムズに対して行った批判から、西田の純粹経験が創造的な活動であることを論じるものである。

周知の通り、西田は『善の研究』（一九二一年）において、「純粹経験を唯一の実在として説明して見たい」（NKZ: 一六）^①と表明し、唯一の実在として純粹経験の性質を論じているが、これもよく知られるように、こうした発想はジェイムズに対する親近感に由来する。西田の純粹経験といえば、主観と客観の区別を前提としない直接的な経験に基づき、種々の区別を唯一の実在の活動から説明するが、こうした特徴の多くは西田がジェイムズから引き

継いだものである。後に述べるように、ジェイムズは私たちの経験を伝統的な枠組みから説明することを抽象的であると批判し、経験論（Empiricism）の徹底によつて具体的な生を論じようとした。ジェイムズによれば、「生」というものは、もと錯綜していて過剰なものである」（BRE: 21）^②であり、根本的経験論は超経験的な普遍性や全体性に依拠しない特殊としての経験がそれ自体で私たちの生であることを論じる。そして、西田もまた経験を単に知識として形式的に理解することを批判しつつ、「個人あつて経験あるにあらず、経験あつて個人あるのである」（NKZ: 一六）という言葉に代表されるように、経験に先立つ区別に依らず、経験そのものを私たちが生きる実在として論じる。すなわち、両者はいかなる超経験的な原理にも依らない特殊的な経験をそれ自体で実在的なものとして描き出すことを目指し、ジェイムズに対する西田の共感もこうした点にあると思われる。

ところが、こうした親和性にもかかわらず西田の純粹経験はジ

ジェイムズと決定的に異なる構造を有し、西田は「凡ての實在の背後には統一」的或者の働き居ることを認めなければならぬ」(NKZ: 一一五五) という。しかし、こうした経験どうしを結ぶ原理の導入は、ジェイムズが指摘する合理論 (Rationalism) の問題点に抵触し、特殊な経験もそれを越えた統一の或者の一部となり、むしろ純粹経験の立場からは遠のくように思われる。この点について、従来の研究では西田の純粹経験の要点がこの統一にあることはよく論じられているものの、純粹経験の立場としての西田が統一の概念を導入することの意義は十分に論じられてこなかった。特にジェイムズとの比較においては、統一がジェイムズに反対する考えとしてのみ扱われ、西田が合理論ではなく純粹経験の立場から具体的な経験を語ろうとしていることが却って見えにくい。そして、本稿で指摘するように、西田が、自身の言う「統一力」を「creative power」とみなしていることについて、その意義が十分に理解されていない。

そこで本論では、まずジェイムズが根本的経験論の中で純粹経験を主張するまでの過程を、『根本的経験論 (Essays in Radical Empiricism)』(1912) に収録されている『意識』は存在するか (Does 'Consciousness' Exist?) (1904) と「純粹経験の世界 (A World of Pure Experience)」(1904) から概観する。次に、抽象的原理に依らず経験の特殊性を発揮するというジェイムズの意図を継ぐものとして西田と比較し、西田が統一という概念を導入することによって過去と未来とがそこにおいて成立する唯一の働きとしての現在の経験を明らかにしていること、そして、従来あまり注目され

ていなかったが、『善の研究』においてはこの現在の経験こそ、全てがそこに統一的に成立する創造的な活動であることを論じる。

一 ジェイムズにおける問題と根本的経験論

ジェイムズの哲学が根本的経験論と称される背景には、経験論や合理論などの従来の哲学が経験における接統的關係 (conjunctive relation) と分離的關係 (disjunctive relation) とを対等に扱っておらず、そのために私たちの具体的な生が論じられないという問題がある。

『意識』は存在するか」の中でジェイムズは新カント派 (Neo-Kantian) を例に挙げ、彼らにとって事物 (things) に対してこれを知るもの (the knower) として考えられる意識 (consciousness) は、「経験が二元的構造を持つことは否定できないという事実を表明するものでしかない」(ERE: 5) ということ、すなわち経験の内容 (content) が知られるという事実を説明するものでしかなく、この内容に対する論理的相関者はその抽象性ゆえに第一原理にはなり得ないことを指摘する。また、「純粹経験の世界」ではグリーン (Thomas Hill Green, 1832-1882) が観念論について、宇宙はそれ自体としては混沌であり、そこには無数の接統的關係があるのみで、世界全体を貫く唯一の型などは存在しない (ERE: 24) と批判した。これに対し、ヒューム (David Hume, 1711-1776) に代表される経験論は全体を個物など諸部分の集合と考えており、具体的な経験の内容を論じるジェイムズは経験論に属するといえる。しかし、ジェイムズによれば「根本的であるためには、経験論は、直接的

に経験されないいかなる要素をも、おのれの構造内に入れてはならないし、また、直接的に経験されるいかなる要素をも排除してはならない。(中略)経験と経験を結びつける関係それ自身が経験される関係でなければならず、およそ経験されるいかなる種類の関係も、体系のなかの他のいかなるものとも同じように、『実在的』とみなされねばならない」(ERE:22)。超経験的な原理を扱わない経験論も、実際に経験されているものを全て説明したわけではない。ジェイムズによれば、「普通の経験論は、接続関係と分離関係とが経験部分としてまったく対等であるという事実にもかかわらず、従来とかく事物の連結のほうを無視して、分離をことのほか強調しようとする傾向を示すのがつねであった」(ERE:22)。つまり、従来の経験論はいずれも私たちに与えられる経験はそれぞれ独立したアトム的なものであるという前提に立つが、この前提こそその接続関係を補うものとして合理論のような超経験的な原理の発想を招くのである。しかし、そうした抽象的な原理を根拠とする限り、経験は形式的で空虚なものでしかない。

そこで、ジェイムズの立場は次のように述べられる。「(中略)世界には根本質料ないし物質、すなわちあらゆるものを構成する素材がただ一つだけ存在するという仮定から出発するならば、そしてこの素材を『純粹経験』と呼ぶならば、そのとき「知るということ」は、純粹経験の諸部分が結びうる特殊な種類の相互関係である、と容易に説明することができる。この関係自体が純粹経験の一部であって、この関係『項』の一方が知識の主体ないし担い手、つまり「知るもの」となり、他方の関係項が「知られる対象」

となるのである」(ERE:4)。ジェイムズによれば、経験には主観と客観という根本的な区別があるのではなく、あらゆるものがそこから構成される素材(material)として「純粹経験」があるのみであり、この現前する特殊な経験はそれが未だ「何」(what)であるか身分の定まらないものであるという意味で「あれ」(that)としかいえないものである⁽⁵⁾。この「一つの与えられた不可分な経験部分が、一方のいろんな仲間たちの文脈のなかに置かれると、〈ひとりの知る者〉の、心の一状態の、『意識』の役割を演ずることになるが、別の文脈の中におかれると、その同じ不可分な一片の経験が「知られる事物」の、客観的な『内容』の役割を演じることになる」(ERE:7)。つまり、合理論における二元的区分は同一で不可分の経験の一片が文脈(contexts)に応じてその役割を演じ分ける二つの様相であり、「同一の経験断片が同時に両群において役割を演じるのであるから、それは同時に主観的でも客観的でもある」(ERE:7)ということができ⁽⁶⁾るのである。

ただし、ジェイムズはこの複数の事実の哲学をモザイク哲学(mosaic philosophy)と呼ぶが、これは単に経験どうしの繋ぎ合わせではない。ジェイムズによれば「現実の経験では、より実体的な部分とより推移的な部分とが連続的に相互に入り込み合っており、総じて、外部から接着剤を用いて克服されねばならぬような分離など存在しない」(ERE:43)。純粹経験の一片は他の経験からの「推移」(transition)において役割を果たし、それらは本質的に前の経験を引き受けつつ後の経験へと続くもので、第三者による接続を必要としない。つまり「この線のなかで、私たちは、回

顧的に生きていると同様に、展望的に生きているのである。この線は、それが明らかに過去の継続として訪れてくる限りでは過去『に』属しており、訪れる未来がそれをひき継いでいるであろう限りでは、未来『に』属している（EHE:43）のである。

このように、ジェイムズは接続的關係と分離的關係とを経験の内で平等に取り扱うことで具体的な生を論じる。ここにおいて特殊な経験は抽象的原理の入り込む余地のないほど密接して推移し、合理論に依ることなく経験論を徹底することで全ての経験は特殊性を発揮する。かくして、私たちの生はいかなる抽象的な制約も受けず常にそれ自身で活動するものとなるのである。⁽⁷⁾

二 ジェイムズに対する西田の評価

——純粹経験と体系の問題——

よく知られているように、西田は『善の研究』の中で何度もジェイムズを援用し、「純粹経験相互の關係及連絡について」（一九〇一年、以下「講演」）では自身がジェイムズと同じ「純粹経験」の立場であることを表明している。とはいえ、西田の純粹経験はジェイムズそのままではなく、統一の概念を導入する点でジェイムズとは異なる方法を取る。

伊藤氏も指摘しているように、ジェイムズが接続ではなく推移を経験の本質と見ていることから、接続の不明瞭さから統一の必要を主張することは必ずしも妥当ではない。しかし、西田が「統一」を導入するのにはなお理由がある。西田は、ジェイムズがあらゆる区別を取り去って純粹経験を唯一の実在とすることに同意しつ

つ、「（中略）経験の發展する道行は断片的のものが段々に結合せられてゆくといふより寧ろ一つのもものが段々に分化發展してゆく」（ZKN: 一三—四〇）ものだという。前に見たように、ジェイムズは経験論から諸部分を強調する側面を継承し、これを超経験的な原理に由ることなく推移しているとするが、西田によれば、このような時間的な連続性だけで各経験の特殊性は強調できない。西田は、経験の統一としての「ユニバーサル」には抽象的なものと具体的なものがあり、後者について「経験の統一とその内容の關係、換言すれば『ユニバーサル』と『パーキキュラル』との關係は（中略）物の両面の如く決して離すことのできない者」（ZKN: 一三—三八）であると述べる。西田の例によれば、一本の樹は枝や葉、根、花などから成り、これを取り去れば樹は無くなる。しかし、かといって枝葉や根、花が樹の全体であるのではなく、やはり樹というなかにこそ枝葉や根、花はあり得るものであり、具体的なユニバーサルとはこの樹全体のような「構成力」（ZKN: 二二—三八）のことをいう。そして西田は、「具体の意義で『ユニバーサル』になるといふことは皆同じくとなると云ふことではない、反つてその各部が特殊の發展をなしてゆくことであります。それが反つて真の具体的『ユニバーサル』を現はすと云ふことになるのであります」（ZKN: 一三—三八）という。つまり、特殊なものとの働きは同時にこれを特殊たらしめる全体の働きであり、構成力を有する全体の現れである。

こうした観点から見ると、根本的経験論においてはあくまでも一つ一つの経験が時間的に連続することが重要であり、経験が推

移し続ける限り絶対的な始点と終点はありえない。つまり、「あれ」としての経験は絶えず過去と未来と連続しており、他の原理を求めることなく全ての経験は推移しつつ特殊となる。しかし、それでは逆に一つの経験の範囲が曖昧となり、現在の経験についてその性質が特定の一つの経験のものなのか、また、ある瞬間が推移するなかで過去と未来の全ての瞬間といかに区別され全体のなかでどのような位置を占めるのかが不明瞭である。そこで、各瞬間の経験が特殊性を発揮する関係について、西田によれば「先ずこれを経験し得るだけの下地が養成せられてこなければならぬ、即ち一つの『システム』がそこまで発展してこなければならぬ、経験はこの『システム』に連結せられ、統一せらるゝことに由つて成立する」(NKZ: 一三—四〇)。また西田は「固より『チエームス』

氏などはかくの如き者は何等の内容なき空名であるといはれるでせうが、此の如き考は経験を構成する『ユニバーサル』を無力とするより起るので、私の考ではすべての経験の根柢にいつでも此の一般の統一力¹⁰が働いて居るのであり、我々の経験は之に由て成立するのであると思ひます。これは一つの creative power であつて、抽象的概念のごときものではありません」(NKZ: 一三—四一)と述べ、自身の統一の概念がジェイムズの批判したものとは異なること、また、それが創造的な力であるとしている。つまり、統一はその経験がその特殊性を発揮し、同時に全てのそれと他の経験との関係が構成されるという働きそれ自身のことである。ここにおいて統一は単に経験を接続するのではなく、それら自身として、その体系において構成する創造的な働きでなければならぬ。

ここに至つて経験は真に特殊性を有することができる。このように、西田における統一は論理的な必要物として経験の外に設けられた原理ではなく、経験が絶えず体系的に関係を構成する働きそのものである。

三 西田の純粹経験における統一の位置付け

以上の主張は『善の研究』にも引き継がれているが、こうして統一が要請されるとすれば、それはジェイムズとどう異なり、それが創造的であるとはどのようなことか。

西田によれば、「時間といふのは我々の経験の内容を整頓する形式にすぎないので、時間といふ考への起るには先づ意識内容が結合せられ統一せられて一となることができねばならぬ。(中略)反つて時間は此の統一作用によつて成立するのである」(NKZ: 一六〇)。通常、私たちは経験が時系列に沿つて過去、現在、未来と流れていくと考えるが、それは各経験が無関係に連続しているのではない。西田は「個性的限定に由りて反つて真の一般を現はすことができる、芸術家の精巧なる一刀一筆は全体の真意を現はすが為である」(NKZ: 一—三六)と述べているが、例えば彫刻を制作する際、現在の一刀は過去に刻んだ箇所を踏まえることで意味ある経験として認められ、次に掘るべき一打を指示するものとなる。また、過去の工程がどのようなものであるかは現在の一刀によつてその意味が明らかとなり、現在の一刀も彫刻の目指すべき全体像によつて決まってくる。このように私たちの経験では過去、現在、未来が相互に密接な関係を保持して一挙に成立してお

り、その構造から統一の働きは一つの特異な経験にこそ現れる。

これを踏まえた際、時間の流れと考えられるものは、絶えずこの連関が統一的に成立するという事態を指し、生に対する考えもジェイムズとは異なってくる。西田によれば、「此者が日々その発展を大きくするのである。時間の経過とは此発展に伴ふ統一的中心点が生じてゆくのである、この中心点がいづでも『今』である」(ZKN:1—161)。彫刻の例でも、現在の一打は過去の過程と目指す未来に支えられていると同時に、その過去と未来を表現する唯一の一打であった。この過去と未来とを表現した現在は、さらにそれを過去とする現在の統一において表現されるのであり、この統一の現在が無限に重ねられていく。つまり、過去を引き受けて未来を志向する現在の経験は絶えず新たな瞬間であると同時に、それによって過去と未来の意味を統一的に表現する唯一の間でもある。私たちはこうした現在でのみ生きており、時間が流れるということはその中心である現在が統一を重ねながら時間的関係を構成していくことなのである。

こうした構造をもつ西田の純粹経験は、私たちに経験されるあらゆる事物が現在において生まれる活動であるといえる。正確には、どの現在という相対的な現在ではなく、全てがそこに統一的に成立する唯一の現在である。逆にいえば、こうした現在でしか私たちは生きることができず、遠く離れていると思われる過去や未来も実はこの現在においてこそ経験されている。ここにおいて、私たちが唯一生きられる現在は、それを中心として過去と未来とが統一的に経験される現在であり、その内には既にその経験が何

処からやって来て何処へ向かうのかということが組み込まれている。つまり、私たちが生きる現在ではそれ自体で自らが展開する道筋を作り出す働きであり、こうした意味での自発性という点で西田の純粹経験は創造的と見ることができるのである。これにより、ジェイムズにとっては特定の原理で捉え切れず溢れ出すものであった生が、西田では混沌ではなく自らを形作っていく働きとなるのである。

おわりに

本論は、西田がジェイムズと同じ純粹経験の立場でありながら統一という概念を導入した意義を、ジェイムズの問題関心との比較から考察してきた。従来の哲学における接続的関係と分離的関係の不均衡な扱いを問題としたジェイムズは、純粹経験を本質的に推移するものとした。しかし、経験の特殊性は時間的連続ではなく体系的であつてこそ発揮されるものであり、ここに統一の働きが認められる。また、過去と現在と未来は密接に関連しており、しかも常に現在を中心として時間的関係を構成していくという意味で、現在は全ての事物がそこで経験される働きである。つまり、西田の純粹経験は、超経験的原理を回避しつつ、全ての特殊な経験が連関を成す唯一の働きとしての現在の経験である。現在の経験は統一的に全ての経験を生み、創造する。これを彫刻の例でいうならば、私たちは他でもない現在の「一打を刻むことを経験するだけである。しかし、それは単に一過程としての一打ではなく、それまでの工程の意義とこれから掘り進むべき方向とが不可分なも

のとして一挙に成立する唯一の一打である。純粹経験は現在を中心として創造的な活動である。現在の経験とは、体系の全てがそこに統一的に成立する創造的な唯一の活動と言うことができるのである。

- (1) 西田からの引用は『西田幾多郎全集』（竹田篤司他編、岩波書店、二〇〇二—二〇〇九年）に基づき、引用の末尾に巻数と頁数を記す。例えば、全集一巻の五五頁ならば（NKZ：一五五）と記す。
- (2) ジェイムズのテキストは以下を参照し、引用の際はその頁数を記す。なお、翻訳は以下の既存のものを参照し、引用の際はその頁数を記す。*Radical Empiricism* [1912], *The Works of William James, Frederick Burkhardt, Cambridge, Harvard University Press, 1976* (ジェイムズ『根本的経験論』(一九二二年) 梶田啓三郎・加藤茂訳、白水社、一九九八年/ジェイムズ『純粹経験の哲学』(一九二二年) 伊藤邦武訳、岩波書店、二〇〇四年)。例えば、*Essays in Radical Empiricism* の二二頁なら（ERE：21）と記す。
- (3) 藤田氏や小坂氏は、西田の純粹経験がジェイムズの影響を受けたその論理がヘーゲルを下敷きとしていることを指摘している（藤田正勝『現代思想としての西田幾多郎』講談社、一九九八年、小坂国継『西田哲学の研究——場所の論理の生成と構造——』ミネルヴァ書房、一九九一年）。だが本論が注目するのは、必ずしもヘーゲルの発想ではない、経験が合理論に依らずそれ自体で特殊であることを強調するジェイムズの志向を、西田が統一や体系の概念を用いつつ引き継いでいるということである。その志向は、例えば西田が経験の關係や特殊な経験に統一の働きが現れることについて、ジェイムズを援用している箇所（NKZ：一七—三六）に見て取ることができる。
- (4) ジェイムズの哲学史的背景については、高坂正顕『西洋哲学史』（創文社、一九七一年）を参照した。
- (5) ここでいう「あれ」は、それが寄り集まって何者かを構成する無個性なものではなく、沖永氏も指摘するように、「純粹経験とはそこに知ら

れるものも知るものも区別されて存在せず、かといってそこは空虚な場でもなく、世界のどこにも位置づけられていないが、原初的に存在している原事実である。」（沖永宣司『心の形而上学——ジェイムズ哲学とその可能性——』創文社、二〇〇七年、五七頁）

- (6) ベリーなども指摘するように、こうした試みは単に二元論を拒否するものではなく二元論を含む原初的な経験への回帰であり、経験の統一性を無視するものではない。また、この点については西田も不十分として認めている。Ralph Barton Perry, *In the Spirit of William James*, Bloomington, Indiana University Press, 1958, p87, NKZ：一三—一九。
- (7) こうした主張の背景には、機械論的宇宙（mechanistic universe）や絶対的觀念論（absolute idealism）に抗して多元的觀念論と自由の実在性を擁護しようとするジェイムズ哲学の一貫した意図がある。Bruce Kuklick, *A History of Philosophy in America 1720-2000*, Oxford, Oxford University Press, 2001, p.177（ルース・ククリック『アメリカ哲学史』(二〇〇一年) 大塚諒・入江哲朗・岩下弘史・岸本智典訳、勁草書房、二〇一〇年、二五九頁）。
- (8) 伊藤邦武『ジェイムズの多元的宇宙論』岩波書店、二〇〇九年、一七二頁。
- (9) 「下地」という語は様々に解釈し得るが、西田がジェイムズを踏まえてこれを用いていることから、ここでは経験の土台を指すのではなく、全ての経験とうしが連関していなければならないことを示す語であるとされる。
- (10) 西田も論じるように、統一といえばこれを一つの経験から直覺的に把握するというのが通常の理解であり、創造ということとは異なるように思われる。しかし、逆に言えば一つの経験が構成されることを以て体系は把握される。この直覺において統一は一つの経験を構成すると同時に自己自身を構成していると考えられ、本論はここに創造の可能性を見ている。
- (11) 正確にいえば、西田は過去と現在に比して未来のことについてはほとんど説明していない。しかし、松本氏は『善の研究』における時間論を

考察する中で、「過去」が優位に対して「未来」がほとんど論じられない理由として、こうした現在における過去の現出ないし過去への立ち返りが、そのまま未来に向けた進み行きの運動となっていることによるとしている（松本直樹「重なりと透かし——西田幾多郎『善の研究』における過去と現在の関係について」『西田哲学会年報』第十号、西田哲学会編、二〇一三年七月、八五頁）。

(12) 森野氏は、ジェイムズが推移を本質的なものと受け止めるのに対し、西田は現在の「深さ」を重視するとし、「瞬間としての現在には背後の無時間的領野という『時の空間』であり、経験の推移はその効果となる。」と指摘している（森野雄介「西田幾多郎『善の研究』における三つの『現在』」『年報人間科学』第三十六号、大阪大学大学院人間科学研究科社会学・人間学・人類学研究室編、二〇一五年三月三日、五三頁）。

(13) よく指摘されるように、統一的或者が根柢に潜む純粹経験はそれ自体対象視されず、これをいかに把握し得るのかということが課題として残されており、ジェイムズもこうしたある種のホーリズム的な発想に対してその一性を把握できないことを問題とするはずである。しかし、西田における統一は根柢や土台のように実体としてあるのではなく、「二即多、多即二」といわれるような表裏一体の働きであり、説明を拒むからといって簡単に破棄できるものではない。こうした知識の根柢にあるものを如何に掘むかという問題は、むしろ『善の研究』以降の西田哲学が取り組んだ問題といえよう。

(14) 秋富氏は、西田哲学が後期に進むにつれて「作る」という契機を導入するようになったことに着目し、その萌芽が純粹経験の「独立自全の活動」が創造的であること、またその創造性が「潜在的『一者』」が自ら発展完成する動態のうちにあることを指摘している（秋富克哉「作るということ——『創造的』純粹経験からの展開——」理想社編『理想』第六一八号、二〇〇八年九月一五日、一七頁）。

（あらい・じゅん、日本哲学・アメリカ哲学、
立正大学大学院博士後期課程）